

ノアの洪水物語の構造と神学

—キアスマスを超えて、四つの段落から読む創世記 6:9–9:17

はじめに：点ではなく面で読む

創世記6章9節から9章17節に記されたノアの洪水物語は、しばしば「キアスマス構造（交差対句法）」によって説明される。A-B-C-B'-A'という対称の中心に「主はノアを覚えてくださった」(8:1) を据え、神の憐れみによって洪水が終わり新しい創造が始まる転換点とする読み方である。この構造はGordon J. WenhamとBernhard W. Andersonが1978年にそれぞれ独立して提示し、特にWenhamによる31要素のキアスマス（彼の言う「パリストロフィー」）は、以後の洪水物語研究に大きな影響を与えてきた^[1]。

しかし、この読みには疑問が残る。キアスマスとして点と点を結ぶ分析は、本文が持つ面向的な広がり——並行する主題群の厚み——を見落としているのではないだろうか。「40日40夜」「7日間」「150日」「何月何日」といった日数と日付の繰り返しから「150日—一心に留めた—150日」という対称が導かれるが、8章1節の「神が覚えてくださった」は、新しい創造の開始というよりも、むしろ直前の段落——すなわち洪水の裁きの完了——を締めくくる言葉として読むべきではないか。

本稿では、この物語を四つの段落に区分し、それぞれの内部構造と段落間の呼応関係を検討することで、キアスマスの一点集約では捉えきれない神学的意味を浮かび上がらせたい。なお、9章18節以降のぶどう園の挿話は、ソドムとゴモラの裁き後のロトの物語と対をなすエピローグとして別に扱い、今回の考察からは除く。

ノアとは誰か：アダム、アベル、ノアの連なり

四つの段落に入る前に、ノアという人物が聖書の中でどのように位置づけられているかを確認しておきたい。洪水物語の直前に置かれた5章の系図は「アダムの歴史」を記し、そこにはカインに殺されたアベルの「代わり」としてのセツが登場する。

ヘブル人への手紙11章によれば、アベルは「優れた生贊」を捧げ、「その生贊によって、彼が正しい人であることがあかしされた」。後に見るように、洪水後にノアが直ちに捧げる生贊は、この「義人アベル」の生贊を明確に想起させるものである。

5章の系図の末尾で、レメクは生まれた子に「ノア」(亞)と名づけ、「この子は主が呪われた地での私たちの働きと手の労苦から私たちを慰めてくれるだろう」と語る。「ノア」は「慰め」「安息」を意味し、アダムの反逆によって呪われた地を回復する者としての期待を担う名である。

そして6章8節——「しかし、ノアは主の前に恵み（耶ヘン）を得た」。暗闇の中に差し込む一条の光のように、この一節が物語全体を導いていく。ノアは単なる生存者ではない。アダムの墮落を背負い、アベルの正しい生贊の系譜を受け継ぎ、呪われた地に安息をもたらすべく召された人物——それがノアである。この前提をもって、洪水物語の四つの段落を読み進めたい。

四つの段落：構成の概観

本稿が提案する区分は以下の通りである。

1. 第一段落 (6:9–7:5) ——裁きの準備と箱舟：正しい人ノアと信仰の100年
2. 第二段落 (7:6–8:4) ——洪水の裁きと神の記憶：水のバプテスマと安息
3. 第三段落 (8:5–8:22) ——水の減退と祭壇：再創造となだめの香り
4. 第四段落 (9:1–9:17) ——契約と祝福：新しいアダムと虹のしるし

前半の二つ（第一・第二段落）は「裁き」を主題とし、後半の二つ（第三・第四段落）は「再創造」を主題とする。さらに外側の二つ（第一と第四）は「契約の救いと祝福」で呼応し、内側の二つ（第二と第三）は「契約の裁き」と「契約の再創造」で対をなす。全体はA-B-B'-A'の並行構造とキアスマス的要素の両方を兼ね備えた四部構成をとっている。

物語を貫く時間軸を一覧すると、以下のようになる。

日付	出来事	段落
500歳 (5:32)	義人ノアがセム・ハム・ヤペテを生む	第一
2月10日 (600歳)	ノアの義認と洪水開始の予告 (7:1–4)	第一

日付	出来事	段落
2月17日（600歳）	洪水の開始、箱舟に入る（7:11）	第二
+40日	雨が止む（7:17）	第二
7月17日（=150日目）	箱舟がアララテ山に止まる／神がノアを覚える（8:1-4）	第二
10月1日	山々の頂が見える（8:5）	第三
+40日	窓を開きカラスを放つ（8:6-7）	第三
+7日×3回	鳩を放つ（8:8-12）	第三
1月1日（601歳）	箱舟の覆いを取り除く（8:13）	第三
2月27日	地が完全に乾く／箱舟を出る／祭壇（8:14-22）	第三
	生めよ増えよ／契約を覚えるしるし・雲の中の虹（9:1-17）	第四

2月17日から7月17日までがちょうど**150日**（1ヶ月30日計算で5ヶ月）。10月1日から2月27日まではおよそ**147日**で、150日に近い数字が再び現れる。そして2月17日に始まった洪水が翌年の2月27日に終わることで、太陽暦と太陰暦の差異による10日のずれを考慮すれば正確に**1年の周期**が閉じる。

第一段落（6:9-7:5）——正しい人ノアと信仰の100年

物語は「ノアは正しく全き人で、神と共に歩んだ」（6:9）という宣言から始まる。この義についての証言は、7章1節で神ご自身が「私の前に正しい人であると私は見た」と確認するかたちで反復される。6章9節の冒頭から7章5節の「ノアはすべて神の命じられたようにした」まで、この段落はノアの正しさとそれに応答する信仰の行為を描く。

対比の軸となるのは、「**暴虐が地に満ちている**」（6:11-12）という現実である。本来「人が地に満ちる」べきところに暴虐が満ちている。正しさと悪、命と死——この二項の対比が段落全体を貫いている。地の滅び（13節）と箱舟の建造命令（14-

17節) が告げられ、「箱舟に入るなら命がある」という契約 (18–22節) が結ばれる。そして7章1節以降、いよいよ裁きの7日前が宣言される。

ノアが500歳から600歳に至る**100年間**——この空白の時を、新約聖書は三つの窓から照らしている。ヘブル人への手紙11章7節はノアが「信仰によって」箱舟を作り、「信仰による義を受け継ぐ者」となったと述べる。第一ペテロ3章は、この期間が「神が忍耐して待っておられた時」であり、洪水が「水によるバプテスマ」の型であることを明かす。そして第二ペテロ2章5節はノアを「義を宣べ伝えた人」と呼ぶ。つまりこの100年は、ノアが信仰をもって歩み、神の義と裁きと憐れみを宣べ伝え、神もまた忍耐をもって悔い改めを待っておられた期間なのである。

その宣教の期間がいよいよ終わり、裁きの洪水が来る——ここまでが第一段落である。

第二段落 (7:6–8:4) ——洪水の裁きと水のバプテスマ

7章6節から、7日後の出来事が語り始められる。ノアの600歳、**2月17日**。この日に天の窓が開かれ、**40日40夜**の雨が降り注ぐ。箱舟に入ったノアたちの外では、水がすべてを覆っていく。

創世記1章では水に覆われた状態から創造が始まったが、ここでは**世界が混沌へと逆行する**。「さらに**15キュビト**の上に水が増した」(7:20) という記述は、山々の頂を超えてなお水位が上がったことを示す。箱舟の高さは30キュビトであるから、その半分にあたる。喫水を考慮すれば、**箱舟が完全に浮き、座礁の危険を脱した**ことを意味する。地に生きるすべてのものが拭い去られ——バプテスマされ——「水は**150日の間、地上にみなぎった**」(7:24)。

8章1–4節の時間関係を前掲の表で確認しよう。2月17日から7月17日まではちょうど150日。したがって8章1–4節は同じ**7月17日**の出来事を記していると考えられる。

「ルーアハ」(רוּא 風／靈) が吹いたという記述は、創造の初めに「**神の靈（ルーアハ）が水の上を動いていた**」(1:2) ことを想起させる。天の窓が閉じられ水が引き始めるが、それは水位の漸減ではなく、あの15キュビト分が下がり箱舟がアララテ山の上に「止まった」ことを意味するのであろう。

ここで注目すべきは動詞の選択である。「アララテ山にとどまった」と訳される動詞は「ヌーアハ」(נוּא 休む) ——すなわち、箱舟がアララテ山の上で「ノアした（安息した）」のである。洪水の裁きが完了し、安息に至ったことを示す語りの技法がここにある。

「神が覚えてくださった」(8:1) という表現が裁きの終結を意味することは、他の聖書箇所からも裏付けられる。創世記19章29節ではソドムとゴモラの裁きの終わりに「神はアブラハムを覚えてくださった」と記され、出エジプト記6章5節ではエジプトでの苦しみの終わりを告げる文脈で「契約を覚えた」と言われる。さらに第二歴代誌6章41節では、ソロモンが神殿奉獻の祈りの最後に「あなたの休みどころに入ってください、力の箱も休んでください」と述べ、続いて「ダビデの誠実な行いを思い起こしてください（覚えてください）」と祈る。「休む」と「覚える」の結びつきは、まさに8章1-4節と同じ構造である。

では、なぜ8章4節と5節の間に段落の区切りを置くのか。三つの根拠がある。第一に、動詞「ヌーアハ」が裁きの完了を宣言しており、物語の主題が「裁き」から「再創造」へと移行する。第二に、日付が**7月17日から10月1日**へと大きく飛躍し、新たな時間単位が始まる。第三に、8章1-4節までは水がすべてを覆い尽くす世界が描かれていたのに対し、8章5節からは山の頂が現れ、**地が姿を現していく過程**が描かれる。**主題、時間、描写**の三点において、ここに明確な断層がある。

したがって、8章1-4節は確かに物語全体の転換点ではあるが、それは「新しい創造の始まり」としてよりも、「裁きの完了」として第二段落を締めくくる位置にある。

第三段落（8:5-8:22）——再創造となだめの香り

第三段落は「10月1日に山々の頂が見えた」(8:5) という新たな日付で幕を開ける。ここから水が徐々に減退していく過程が丹念に描かれる。40日を経て窓を開き、まずカラスを放ち、次に鳩を放ち、さらに**7日待って再び鳩を放つ**。この「7日待って」は、洪水の前に「7日後に雨を降らせる」(7:4) と言われたことを想起させる。

601歳の**1月1日**、ノアは箱舟の「覆い」(הַכָּעֵד ミフセ) を取り除く。箱舟の建造命令にはこの「覆い」を作れとは明記されていなかったが、幕屋にかかる覆いのように**神の保護を象徴する**ものであろう。その覆いが取り除かれるとき、救いの完成が近いことが示される。

地が完全に乾いたのは**2月27日**。2月17日に始まった洪水が翌年の2月27日に終わることで、ほぼ**1年の周期**が閉じる。

14-19節で「箱舟を出なさい」という命令が下り、ノアは箱舟を出る。そして20-22節、ノアは直ちに**祭壇**を築き、**全焼のいけにえ** (הַלְּבָנָה オーラー「登りゆくいけにえ」) を捧げる。主はその「**なだめの香り**」(תְּמִימָה レーアハ・ニーホーアハ) を嗅ぎ、心の中で言われる——「二度とこのようなことはしない」。

この生贊はまさに、先に触れた「義人アベル」の生贊の系譜に連なるものである。ノアは箱舟を出るや否や、命令を守り、生贊をもって契約のしるしを神に訴えた。それはとりなしの祈りにほかならない。

第四段落（9:1-9:17）——新しいアダムと虹の契約

なだめの生贊を受けて、9章1節では「生めよ、ふえよ、地に満ちよ」という祝福の言葉が与えられる。アダムに与えられたのと同じ祝福が、新しいアダムとしてのノアに繰り返される。ただし、ここには新たな要素が加わる。9章6節の規定——人の血を流す者には人によって血が流される——は、かつて「暴虐が地に満ちた」ことへの応答である。暴虐が蔓延する前にそれを制する秩序が設けられ、「暴虐が満ちる」に代えて「人が地に満ちる」ことが目指される。

8-17節では、地を滅ぼす洪水を二度と起こさないという契約が正式に結ばれる。第一段落（6:18）で「私はあなたと契約を立てる、だから箱舟に入りなさい」と言わされた約束が、ここで成就する。そしてその契約のしるしとして「雲の中の虹」が置かれる。注意すべきは、単なる「虹」ではなく「雲の中に虹がある時に」という表現が用いられていることである。これは神が見るしるしであり、神ご自身がこの虹を見て契約を覚えると宣言される。

全体構造：契約と再創造の神学

四つの段落を俯瞰すると、以下の構造が浮かび上がる。

外側の二つの段落（第一と第四：AとA'）は「契約の救いと祝福」で呼応する。第一段落では、契約を信じて箱舟に入り、命令を守ってとどまることによって救われる。第四段落では、契約の祝福が成就し、新しい秩序のもとで地に満ちるよう命じられる。

内側の二つの段落（第二と第三：BとB'）は「契約の裁き」と「契約の再創造」として対をなす。第二段落で水がすべてを覆い尽くした世界が、第三段落では乾いた地として再び姿を現す。

ここで箱舟の寸法が示唆的である。長さ300キュビト、幅50キュビト、高さ30キュビト。一方、契約の箱（אַרְנוֹן הַבָּرִית、アロン・ハブリート）は長さ2.5キュビト、幅1.5キュビト、高さ1.5キュビト。契約の箱を20倍にすれば $50 \times 30 \times 30$ となり、長さは100倍で300。比率として見れば、ノアの箱舟は契約の箱が10個つながった形に相当する。「箱舟の中に入って命令を守るなら救われる」という構図は、「契約の箱の中

の命令（十戒）を守ってとどまるなら救われる」という型論的イメージと重なり合う。契約の箱を覆う「なだめの蓋（おおい）」の上から神が語りかけるように、箱舟の中でもまた神の臨在が守りとなっている。

再創造とは、単に世界が造り直されることではない。「人が新しくなること」と「地が新しくなること」の二つが必要である。古い人アダムから新しい人ノアへ。呪われ暴虐で満ちた地から、洗い清められ命が満ちる地へ。ノアは新しいアダムとして、100年にわたり義を宣べ伝え、地が乾くのを待ってなだめの生贊を捧げた。それは義人アベルの生贊を想起させる正しい行いであり、とりなしの祈りにほかならない。

補論：洪水の日付と日数、その後の歴史への反響

洪水物語に刻まれた日付と日数は、ノア以後の聖書の歴史の中に繰り返し姿を現す。四部構成の論証とは直接関わらないが、これらの数の反復は、洪水物語が孤立した一回的出来事ではなく、聖書全体を貫く「型」として機能していることを示している。以下、五つの観点から概観する。

1. 生命誕生と聖別の基本設計——「40+7+8」

新しい生命の始まりは、母体内での約40週という待機期間を経て、誕生後7日間のきよめの期間、そして8日目の割礼——神との契約のしるし——というリズムに基づいている（レビ記12:2-3）。この「40+7+8」のサイクルは、人間という存在が混沌から聖別へと至るための基本単位であり、聖書全体の構造を規定する雛形となっている。洪水物語における「40日の雨」「7日ごとの待機」「箱舟を出た後の新しい契約」は、まさにこの生命誕生のリズムの原型である。

2. シナイ山の40日40夜——契約の板と契約の箱

モーセはシナイ山に上り、40日40夜を神の前で過ごして契約の十戒の板を受け取った（出エジプト記24:18、34:28）。ノアが40日40夜の雨の中で箱舟にとどまり、裁きと救いの境界を経験したように、モーセもまた40日40夜を山上で過ごし、契約の言葉を受け取る。そしてその板は「契約の箱」(*אָרוֹן הֲבֵרִית*)に納められた。本論で述べたように、ノアの箱舟（*תְּבֵרֶה* テーバー）と契約の箱（*אָרוֹן* アーロン）は寸法の相似形をなしている。箱舟の中で命令を守ってとどまることによって救われたノアの経験は、契約の箱の中に十戒の板が納められ、その命令を守ってとどまることによって民が生きるというシナイ契約の構造へと直結する。洪水の40日40夜は、シナイの40日40夜の原型であり、箱舟は契約の箱の原型なのである。

3. ノアのバプテスマと主イエスのバプテスマ

第一ペテロ3章が洪水を「水によるバプテスマ」の型と呼んでいることはすでに本論で触れた。主イエスはヨルダン川で水から上がりバプテスマを受け、鳩のように聖靈が降った後、40日間荒野でサタンの試みを受けられた（マタイ4:1-2）。ノアが水のバプテスマを経て、40日の待機と鳩の放出を経験したのと同じリズムが、ここに再現されている。洪水物語の「水—鳩—40日」という型が、キリストの公生涯の出発点において成就したのである。

4. エズラ記における「大雨の中の聖別」と日付の同期

バビロン捕囚から帰還した民が異邦人との混交という罪に直面した際、エズラは大雨の中でその清算を行った（エズラ記10章）。注目すべきは、このプロセスの日付が洪水物語と同期していることである。調査の開始が10月1日——ノアの物語で山々の頂が見えた日（8:5）——であり、完了が1月1日——ノアが箱舟の覆いを取り除いた日（8:13）——である。ノアの時代に始まった「カナン的混交」の問題を、大雨の中で洗い流し、聖なる民としての秩序を取り戻す。エズラの改革は、洪水物語の日付を意図的に踏襲した再創造のプロセスであったと言える。

5. エゼキエルにおける「箱舟と神殿」の空間的設計図

エゼキエルの預言もまた、栄光の雲の中に現れた虹（エゼキエル1:28）、召命後の7日間の待機（3:15）、反逆の家の罪を担うための40日（4:6）という数字を内包しており、ノアやモーセ、そしてイエスの歩みと重なる。特にエゼキエルが詳細に記録した新しい神殿の寸法と構造（40-48章）は、ノアの箱舟の設計思想の延長線上にある。死と裁きが支配する世界において、選ばれた命を安全に收め、神との交わりを回復させるための「聖なる空間の設計図」——箱舟と神殿は、共通の数理によって貫かれている。

結び：栄光の雲と虹

最後に、「雲の中の虹」について触れておきたい。「雲」は聖書において繰り返し「栄光の雲」として現れる。出エジプトの雲の柱、神殿奉獻の時に満ちた雲、エゼキエルの幻に現れた虹を伴う栄光——いずれも神の臨在を示すしである。

ノアが祭壇で捧げた全焼のいけにえは「登りゆくいけにえ」（オーラー）であり、煙と火が天に向かって上っていく。それはあたかも栄光の雲を地上から立ち上らせる行為である。神のおられる天に、この雲と虹——栄光の光——が届けられる時、神は天から見てその契約を覚えてくださる。

ここに、地上からの祈りと天からの応答という垂直の対話が成立する。ノアの全焼のいけにえが栄光の雲を生み出し、その雲の中に虹が現れ、神がそれを見て契約を覚える。

「主はノアを覚えてくださった」(8:1) ——この一節の重みは否定しない。しかし、物語全体をキアスマスの一点に収斂させるとき、ノアが何者であり、再創造が何を意味するのかという、本文が面的に展開する主題群は後景に退いてしまう。洪水物語は、点で結ぶ対称構造としてではなく、四つの段落が織りなす厚みのある物語として——契約と裁きと再創造の神学として——読まれるべきである。

注

1. Gordon J. Wenham, "The Coherence of the Flood Narrative," *Vetus Testamentum* 28/3, 1978, pp. 336–348; Bernhard W. Anderson, "From Analysis to Synthesis: The Interpretation of Genesis 1–11," *JBL* 97, 1978, pp. 23–39. 両者は独立して同じキアスマス構造を提示した。特にWenhamの分析は最も詳細で影響力が大きい。彼は創世記6:10–9:19に31要素のキアスマスを同定し、中心点(8:1「神がノアを覚えられた」)の両側に15要素を配置した。Wenhamはこれを「パリストロフィー」(palistrophe)と呼び、「自らに折り返す構造」と定義している。彼の主要な対応要素は以下の通りである。A/A'：ノア(6:10a / 9:19)、B/B'：セム・ハム・ヤフェト(6:10b / 9:18b)、C/C'：箱舟の建造(6:14–16 / 9:18a)、E/E'：契約(6:18–20 / 9:8–10)、G/G'：箱舟に入る命令／出る命令(7:1–3 / 8:15–17)、H-I/H'-I'：7日間の待機(7:4–10 / 8:10–12)、L/L'：40日(7:17a / 8:6a)、O/O'：150日(7:21–24 / 8:3)、中心P：「神がノアを覚えられた」(8:1)。Wenham自身の言葉によれば、「この構造は洪水の出来事の性格に文学的表現を与えていた。水の上昇と下降が、その叙述における鍵語の上昇と下降に反映されている。第二に、この物語の真の転換点に注意を向けさせる。すなわち8:1『神がノアを覚えられた』」(VT 28, pp. 339–340)。本稿は、この「真の転換点」の位置づけそのものを再検討するものである。 ↪